

かいさんこうくじ　とうろうやき

開山興国寺の灯籠焼き

◎お盆の8月15日の午後8時頃から、法堂(本堂)^{はつどう}の前に、檀信徒の各家から、年により増減があるが約50～70基の切子灯籠を灯して集まって来る。

初盆(新盆)の切子は白張り、年忌の切子は色張りであり、それぞれの家紋を入れた立派なものである。一辺が15センチから18センチもあり、下に「南無阿弥陀仏」の文字を刻んだ袴やソーマンというピラピラを付け、竹の棒につけるので3メートルを越えています。

9時になると、法堂内で読経^{どきょう}が行われ、太鼓・六斎念仏衆・興国寺高灯籠・堂師(老師)・僧侶・切子を持つ檀信徒の列が法堂の回りを3回廻る。その間、虚無僧たちが、法堂の外の階段下で尺八を吹き続ける。

3回廻り終わると、虚無僧を先導に参道を通り、約300メートル離れた無常堂広場へと向う。薄暗い参道、石畳を降る行列は幽玄の世界であり、カメラマンたちにとっては傑作写真を撮ろうと必死に走り回る。



午後6時半頃



※ 無常堂広場で

開山興国寺のとうろうや灯籠焼きについてご説明申し上げます。

これから、行われるとうろうや灯籠焼きは「エー ナア -アーム- アーミーダア アンブ」というろくさいねんぶつ六齋念仏
しゅう衆の唱える「なむあみだぶつ南無阿弥陀仏」の声をバックに、こども子供たち(小・中学生)がたいまつ松明を持って踊る「たいまつ松明
おどり踊り」と、どよう土桶と呼ばれる大松明を一人で担ぐ「かつぐ土桶担ぎ」、最後にこ夜空を焦がす「とうろうやき灯籠焼き」の三
部からなっています。

とうろうやこの灯籠焼きは、ぼんお盆のしょうりょうおくり精霊送り行事として、かまくら鎌倉時代から行われ、れきし約750年の歴史を持つと
いわれています。むけいみんぞく昭和35年に和歌山県の無形民俗文化財に指定されています。また、してい松明踊りの
むしおく念仏が、ねんぶつ虫送りの念仏の一つである事から、ほうさく実りの秋の豊作を期待する人々の願いが込められた
行事であり、さらに、となりきんじよ隣近所のつながりを深め、ふか成人儀礼の一つである力ちから自慢を競う場であると
もいわれています。

いま、「エーナーアム アーミ ダー」の六齋念仏に合わせて、子供たちが踊っているのは、
たいまつおどり「松明踊り」といって、こうこくじかいさん興国寺開山 ほっとうこくし法燈国師がねんぶつしょうわ念仏唱和にふりつけ振付したものであるといわれており、
高野山系のはつび念仏踊りといわれています。また、子供たちの着ているせなか法被の背中には、げんじ源氏のもんどころ紋所
を表す【ささ笹りかたんどう】が形どられています。

きんねん近年、へ少子化で、子供たちが減っていますが、子供たちは数日前から、夜、集会所に集まって、地
ちやうろう区の長老や青年からせい踊り方を教わって来ました。いま、その成果を皆さんに見て頂くために一生懸命踊っています。



むじょうどう らん のほ けむり ほのお どようかつ じゅんび
さて、無常堂の入口の方をご覧ください。もくもくと立ち上る煙と炎の中、「土桶担ぎ」の準備が
されています。

どようかつ かままわり せんこう ひょう
これから、行われる「土桶担ぎ」は、「釜廻り」「線香立て」「拝み合わせ」「俵返し」があり、いずれ
も、一人で担がねばなりません。

どよう えんとうけい
この土桶は長さ、4メートル20センチ、重さは約120～150キロ、円筒形の非常に大きいもので、
門前区を4つの班に分けて4本作られています。

ざいりょう しだ じく しだ とおか
この材料は、おに羊歯といて、軸の長い羊歯が使われています。檀家衆が十日
ぐらい前から山に行って、一軒に一束 羊歯を刈ってきます。その羊歯を今朝から持ち寄って、
いくえ なわ あおざさ かざ
幾重にも積み重ね、縄でくり、最後に青笹で飾っています。



だいたいまつ どよう
両端に火をつけた 大松明 = 土桶 が入って来ました。まず、初めは中心の釜を 3回 回る
かままわり
「釜廻り」です。

たわら えんとうけい
※重さ120キロといえ、60キロの 俵 を2つ持ち上げることになります。円筒形をしているので、
むつか
コロコロしてなかなか肩に乗せるのが 難しいのです。

どよう かつ かんたん
※また、昔と違って、力仕事をする事が少なくなった現代、一人で土桶を担ぐ事は簡単ではあり
ません。昔はこの倍位はあったといわれていますが、もうほとんど無理な時代になっています。



※重さは燃えるためにだんだんと軽くなりますが、^{わる}バランスが悪くなり、^{せなか}火が背中や手に迫って来るので、^{よけい}余計に^{かつぎにく}担ぎ難くなります。

^{かままわり}4本の^{ふじ}釜廻りが無事終わりました。次は釜の^{かま}周りに^{まわ}一本ずつ立てて行く「^{せんこうた}線香立て」です。これは仏様に線香を上げる意味を持っているといわれています。



3番目は2本を^{おがみあ}組にして斜めに立てける「^{おがみあ}拝み合わせ」です。線香を立てた後、仏様を^{おがみあ}拝んでいる形です。

4番目は「^{ひょうがえ}俵返し」といわれています。この「^{ひょう}俵」というのは、^{たわら}俵の事、^{ちから}力、^{じまん}自慢、^{きそ}を競った^{なごり}名残でしょうか。

^{どよう}4本の^{いげた}土桶が「^{いげた}井桁」に^{どよう}組まれて、^{どよう}土桶担ぎが^{どよう}終わりました。

最後に興国寺灯籠焼きのクライマックス「灯籠焼き」の始まりです。



皆さん、あたりを見回して下さい。ひときわ大きな灯籠が開山興国寺の高灯籠です。

一辺30センチもあり、笹竜胆の紋が張られています。その後が続く檀家の切子灯籠は一辺15センチ

から18センチのもので、7・80基位の数でしょうか。初盆は白張り、3年、7年などの年忌の霊は

色張りされ、それぞれの家の家紋が刻まれています。

その切子灯籠が次々と焼かれていくのです。



本日は、開山興国寺にお参り頂き、また遅くまで、灯籠焼きをご覧頂き有難うございました。

お帰りは足元が悪いので、気をつけてお帰り下さい。(午後11時頃)

(文責 ゆら語り部クラブ代表 大野 治)